



医療法人財団 順和会

山王病院



山王バースセンター

無痛分娩について

目次

- はじめに
- 無痛分娩の方法
- 硬膜外麻酔について
- 無痛分娩を始める時期
- 無痛分娩中の制限
- 無痛分娩のメリット
- 無痛分娩における進行の変化
- 無痛分娩のリスク・副作用
- 特に前もってご相談いただきたい方
- 患者さん固有の問題点
- 以上の説明に対する患者さんからの質問とそれに対する回答

● はじめに

無痛分娩とは麻酔の技術を応用して陣痛の痛みを和らげることのできる分娩方法です。欧米では広く普及している手法であり、安全性は高いことが確立しています。しかし、麻酔関連の医療的な処置ですので、まれな頻度ですが重大な合併症が起こり得ます。下記のリスクやデメリットを十分にご理解いただいて麻酔による無痛分娩をご選択ください。より詳しい質問や疑問点がある方は麻酔科医、産科医、助産師にお声掛けください。また、母児の生命の安全を最優先とするため、場合により無痛分娩を中止する場合がございます。

● 無痛分娩の方法

当院では主に硬膜外麻酔を用いて無痛分娩を行います。無痛分娩における硬膜外麻酔は世界的にスタンダードな手法です。場合により脊髄くも膜下麻酔を併用することがありますが、基本的なメリットやリスク・副作用はほぼ同じです。

脊髄に近い硬膜外腔という部位に、細くて柔らかいカテーテルというチューブを挿入し、留置します。そのカテーテルから適宜、局所麻酔薬を追加することでお産中の痛みを和らげます。

いずれの方法も、出産時には意識があり、赤ちゃんと対面できます。

● 硬膜外麻酔について

麻酔前に静脈点滴を行います。また母児の状態を細かく確認するため、心電図や血圧計などのモニターを装着します。

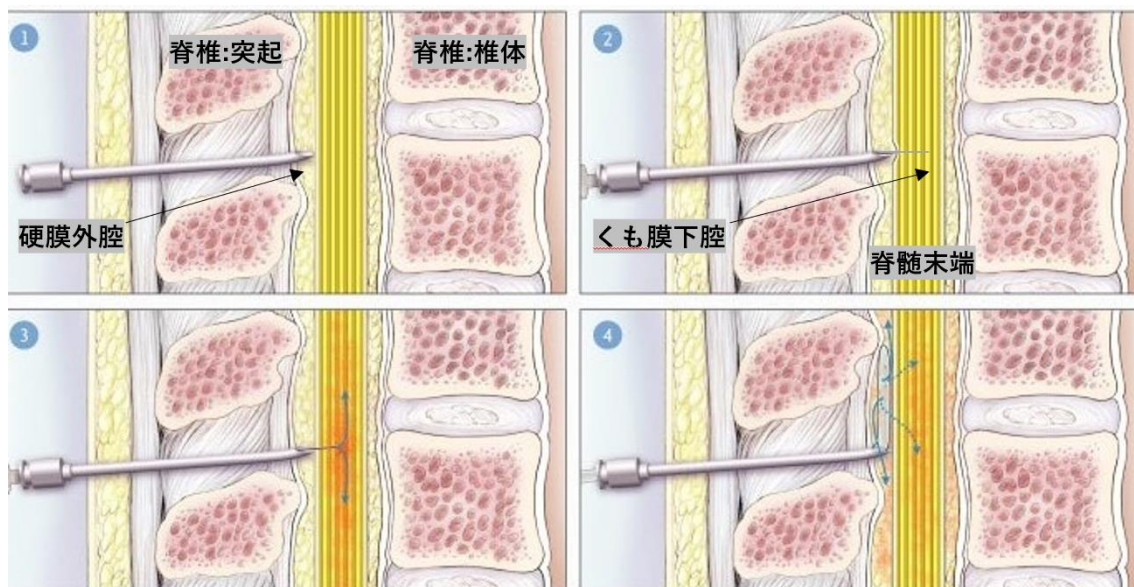
次図のように、座る姿勢もしくは横向きの姿勢で背中を丸めていただきます。そして十分に消毒し、カテーテル挿入処置をいたします。まず皮膚表面に局所麻酔をし、次にカテーテルを入れる用の針を進めます。硬膜外腔にはカテーテルのみを留置し、針は抜きます。薬は15分前後かけてゆっくり効いてきます。



硬膜外麻酔のみの場合は下図①④のみ、

硬膜外麻酔と脊髄くも膜下麻酔を併用する場合は下図①②③④を行います。

- ① 硬膜外腔までカテーテル用の針が到達
- ② 脊髄くも膜下腔へ細い針が到達
- ③ 脊髄くも膜下腔へ薬剤投与
- ④ 硬膜外腔へとカテーテルを留置/薬剤投与



Eltzschig HK, Lieberman ES, Camann WR. Regional anesthesia and analgesia for labor and delivery. N Engl J Med. 2003 Jan 23;348(4):319-32. doi: 10.1056/NEJMra021276. PMID: 12540646. から上2図を抜粋および日本語を追加編集。

また、一度挿入しても時間が経つと一定の確率で効きが悪くなったり、片側しか効かなくなったりする場合があります。その場合カテーテルを少し引き抜いたり、薬の量を調整したり対応をしますが、それでも改善されない場合、カテーテルの入れ直しをします。つまり一度カテーテルを入れて終わりではなく、最後まで効果のあるカテーテルへと常にメンテナンスをしていくものをご理解ください。

● 無痛分娩を始める時期

基本的に陣痛が来てから、妊婦さんが望むタイミングで麻酔を開始できるよう対応しています。多くの場合、痛みがある程度出てきたところで開始します。

場合により、カテーテルのみあらかじめ挿入しておくこともあります。妊婦さん、赤ちゃんの状態をみて、よりメリットの多い方法で行いますので相談させてください。

無痛分娩をご希望されるタイミングが出産直前などで、あまりにも陣痛の痛みが強くなってしまった時期の場合、カテーテルを挿入する姿勢が維持できない、最適な場所にカテーテルを留置できない、効くまでの時間すら間に合わない場合などの可能性があります。

● 無痛分娩中の制限

無痛分娩中は以下のような制限事項があります。

- 飲食：誤嚥性肺炎の危険性を減らすために、無痛分娩中は原則として食事を禁止しています。少量の飲水は可能ですが、点滴からも水分を補います。ただし、分娩時間が長くなる場合には、必要に応じて軽食をとっていただくことがあります。
- 歩行：麻酔による運動神経麻痺で歩行中に転倒する危険があります。麻酔開始後は原則としてベッド上安静とします。
- 排尿：無痛分娩中はベッド上安静となるのでトイレにいけません。また麻酔による影響で排尿困難になるので定期的に尿道に細い管を入れて導尿します。

● 無痛分娩のメリット

最大のメリットは陣痛の痛みが少なくなるため、リラックスした気持ちでお産ができるようになることです。また自然分娩より疲れにくい、身体的にも精神的にも楽だったという感想も聞かれます。また、胎盤を通して赤ちゃんへの血流が改善します。そして緊急で帝王切開を行わなければならない状況になったとしても、留置してあるカテーテルから薬剤を追加投与すれば、追加で処置をすることなくすぐに手術を行うことができます。

● 無痛分娩における進行の変化

無痛分娩を行うと、分娩最後の進行が緩徐になることが分かっています。具体的には子宮の出口が全開大になってから赤ちゃんが出てくるまでの時間が伸びると言われています。しかしお母さんと赤ちゃんが元気であれば、その時間が多少伸びても問題はありません。

また自然分娩と比べて鉗子分娩や吸引分娩の確率が高くなると言われています。鉗子や吸引

カップを使い、赤ちゃんが出てくる最後にお手伝いをする分娩です。帝王切開になる率は上昇しないという報告が多いです。

● 無痛分娩のリスク・副作用

無痛分娩は主に欧米で広く用いられる手法で、安全性の高い医療として確立しています。しかしどのような医療行為でも、合併症が起こる可能性があります。

➤ 一時的な血圧低下

麻酔の影響で一時的に血圧が低くなることがあります。点滴や薬剤を使用し対応します。

➤ 掻痒感

麻酔薬の影響で妊婦さんの体全体にかゆみがでることがあります。

➤ 発熱

ときおり硬膜外麻酔中に妊婦さんが発熱することがあります。分娩後おさまることが多いです。お産までに熱が高くなるようでしたらクーリングで体温を下げます。また感染など、他の原因が関係する可能性がある場合、採血などの検査を行う場合があります。

➤ 頭痛

1%程度と言われますが、頭痛が起こることがあります。また、カテーテル挿入時は盲目的に針を進めるため、意図せず硬膜を穿刺してしまう場合があります。硬膜を穿刺した場合は高確率で頭痛になります。この頭痛は立ったり、座ったりすると強くなるので、授乳が辛いと感じることがありますが、多くは1週間以内になくなります。程度はまちまちで、痛みが強い場合はブラッドパッチという治療（硬膜外腔にご自身の血液を注入し、頭痛を改善させる処置）を行うことがありますので我慢せずにご相談下さい。

➤ 硬膜外血腫

ごくまれに（0.5%以下）、針を進めた場所、カテーテルを留置した場所付近に血腫（血のかたまり）ができることがあります。カテーテルを留置した後、またはカテーテルを抜いた後に、足のしびれや力が入りにくいなどの症状が起こることがあります。血腫を除去する処置や手術が必要になることがあります。

➤ 局所麻酔中毒

ごくまれにカテーテルが血管内に迷入した場合などに、局所麻酔中毒になることがあります。意識障害、循環不全、呼吸困難につながるおそれがあるため迅速な対応が必要となります。

➤ 高位ブロック

ごくまれに脊髄くも膜下腔という部位にカテーテルが迷入してしまった場合、麻酔が上半身にまで効いてしまうことがあります。意識障害、循環不全、呼吸困難につながるおそれがあるため迅速な対応が必要となります。

➤ 神経障害

ごくまれ（0.5%以下）に麻酔の影響で神経障害が起きます。穿刺時に直接神経を損傷する場合、カテーテルの位置異常による場合、偏った箇所薬の毒性が出る場合などで起きます。神経障害が起きると、下肢の筋力低下、感覚異常、排尿障害などが生じます。回復までに数

週間から数か月かかる場合があります。神経症状については難治性になる場合があります。また、麻酔による神経障害以外に、無痛分娩との直接の因果関係のない、分娩そのものに起因する神経障害もあります。

➤ **不十分な鎮痛**

カテーテルの明らかな位置異常や薬剤投与量不足などで生じる疼痛に関しては、調整することが可能です。しかし原因不明で鎮痛が不十分になる場合があります。解剖学的にそもそも硬膜外腔への到達が難しい、硬膜外腔の部位に隔たりがあり薬が拡がりにくい、など様々な理由が考えられます。状況に応じて困難な場合もありますが、考えられる限りの最善を尽くします。

以上の無痛分娩に伴う問題点に対応するため、硬膜外麻酔を行った後は、常にお母さんの心電図、血圧、酸素飽和度をモニターし、定期的に医師および産科スタッフが観察します。また、赤ちゃんの心拍モニターも分娩中は継続して行い、異常の早期発見に務めます。合併症が起きたときは適切に対処します。

麻酔効果には若干個人差があります。効果が不十分と感じられるとき、また、麻酔の状態に不安を感じられるときは、ご遠慮なくご相談下さい。

＊無痛分娩に関して合併症が生じた場合は、その対処・治療は保険診療で行います。

● **無痛分娩費用について**

当院では無痛分娩の費用として、通常の分娩費用に加えて料金を頂いております。このなかには無痛分娩に使用する特殊な針や麻酔薬の料金も全て含まれています。分娩の満足度に関わらず、無痛分娩費用は発生しますのでご了承ください。

● **特に前もってご相談いただきたい方**

心疾患、呼吸器疾患、脊椎疾患、手術後の方、血液を固まりにくくするお薬を服用する抗凝固剤療法中の方、などの合併症や既往のある方は妊娠の早い段階でご相談ください。無痛分娩が可能かどうかの判断を含めて対応いたします。

● **患者さん固有の問題点**

● **以上の説明に対する患者さんからの質問とそれに対する回答**

多くの妊婦さん方が、ご自身の理想に少しでも近づくお産ができるよう、無痛分娩を選ばれています。しかし医療処置に伴うリスク、デメリットをご理解いただき、同意する方のみ麻酔による無痛分娩をご選択なさってください。より詳しい質問や疑問点がある方は麻酔科医、産科医、助産師にお声掛けください。

2025 年 3 月 21 日